

い」とか「私は汝の前ですべてを露にします。私は汝の前ですべてを露にします」とか「この地上を、天上を通して見ることができますように。この地上を、天上を通して見ることができますように」というように。時とともに、この隠れた祈りの生活は言葉を超えて、ただ「わが神、わが神、聖なるお方、わが愛する者よ」という絶叫や、ウパニシャッドの礼賛「おお、不可思議なる、不可思議なる不思議さよ」へと変わってゆく。もはや言葉は止み、無言の崇敬と服従と喜悦と歓喜と神への賛美の心立てで、私たちは立ち、歩み、座り、臥すようになるのだ。

聖なる服従の第三のステップはむしろ助言なのだが、もし君がうっかり躓いて、一時間でも神を忘れ、かつての傲慢に満ちた自我を主張し、自分自身の才知をあてにしてしまった時には、後悔や自責の念にあまり時間を費やさず、ただ君のいるその場所からまた歩み始めることだ。

そして聖なる服従に関する第四の考慮すべき点、それは歯を食いしばって、こぶしを堅くにぎりしめて「私が、私がするのだ」と言わないことだ。リラックスしなさい。手を離しなさい。神に全身を委ねなさい。アメリカ人にとっては難しいことだが、黙従という受動態のなかで生きることを学び、いのちがその意のままに君を通りぬけるようにしなさい。「私がするのだ」というのは、それこそ不服従をもたらすのだから。

(未完)

その生と死に深い思いを致す時や、閃く啓示——フォックスの言う「大いなる開示」——を通して訪れることもある。だがこの魅惑のひとつの来歴が何であろうと、このような絶対的に聖なる生活の幻は、永遠なるお方の進攻であり、促しであり、招きであり、働きかけの御業であると私は確信している。現代の心理学が、聖か俗かの域を問わず、洞察の閃きを完全に説明できないのは実に奇妙なことである。それはあたかも創造者の精神の泉が溢れて、備えられた人の霊のなかに何かを表現しようと沸き立っているようなものである。引きたてる力に満ちた尽きせぬ泉が私たちの内に漲り、目もくらむばかりの幻で私たちを捉えようとしているのである。そう、創造者たる神が私たちの魂に入り込んでくるとしか言いようがないのだ。無窮性の端緒が私たちの身边を漂うのである。想像力は聖なるものであり、それは実在が私たちの心へ入る門口なのである。天の獵犬は私たちの臭蹟を追い、愛の神が、その聖なる生命に來たれと私たちを呼び寄せておらるのだ。

ひとたびこのような幻を体験した後の聖なる服従への第二のステップ、それは諸君のいるところから歩み始め、今すぐに従うことだ。たとえそれが一粒の芥子種のように微小であっても、君ができ得るだけの服従を行使しなさい。君のいる場所から始めなさい。今のこの時を生きること、諸君が席に座っているままの今のこの時、心を開いて、完璧に全きまでの服従をすることだ。外側では私のこの言葉に耳を傾けても、いわば裏舞台の内側では、永遠なる愛の神と一対一となるいのちの深層のうちに、沈黙の祈りを続けなさい。「私の生命を露に開いて下さい。私の考えを私が望むままにではなく、汝の意のままにお導きください。汝の御意が行なわれますように」。街を歩き、友達と一緒に語りたまえ。だがいわば舞台裏では、ひたすら神に従いつつ自分を捧げ、一刻一刻が祈りにあるようにしなさい。この不断の内的な祈りの生活は絶対に不可欠だと私は考える。これは昼夜を問わず、仕事に追われている真っ最中でも、家庭でも学校でもできるのだ。このような服従の祈りは至って単純なものでよいのだ。短い句を何度も何度も繰り返すのがよい。例えば「私の意をあなたのものとしてください。私の意をあなたのものとしてください」

ら天においても地においても、神の御意、神のいとも小さな願い、神のかすかな息吹ほど大切なものはないからだ。かくして聖なる服従は定着し始める——、影のように鋭敏に、素直に、そして無私に。人は渋々ではなく、熱情をもって後半の道のりも神に従おうと切望するようになる。神の命ずるところを仰ぐべく、一刻を争うような素早さでいそいそと飛び起き、走っても疲れず歩いても倦むことのない体勢を整えるのだ。

私を誤解しないで頂きたい。私たちの目下の関心は神への全き服従の生活であって、特定の人だけに許された、神の栄光の驚くような啓示ではない。とはいえ、神秘家のこのような非凡な体験は、神によって鎮められ、占有された意志としていつまでも残るのだ。意識の状態は移り変わり、幻は消え去る。だが聴く耳を持つ、注意を怠らない聖なる服従は、神に酔わされたいのちの核として、また醒めた普段のあくせくした生活の不変の模範として残る。ある者は、このさながら受け身の道を通して完全な服従の状態へと導かれるのだ。そこでは神のみが行為者であり、私たちはただ動かされているかのようである。そして私たちの意志は融解し、溶け去り、柔軟になり、神の中にしっかりと固定される。かくして神は私たちの内にその御意を働かせるのだ。

しかしこの徹底した服従への受け身の道とは対照的に、大方の人はジャン・ニコラ・グルー(1713~1803, フランスのイエズス会司祭、  
靈的生活に関する静寂主義的な著作家。)が「活動の道」と呼んだ道をたどらなければならない。そこでは、昔のヤコブが夜明けまで天使と格闘したように、私たちはもがき奮闘しなければならない。この活動の道では、私たちの意志は少しずつ、徐々に神の御意の支配下に置かれてゆかねなければならない。

とはいえ、この後半の服従への第一歩は、このような驚くべき生活の燃え立つ幻から始まる。このような幻は誰にでも、折々に訪れる。聖人の伝記やフォックスと草創期のクエーカーの日記を読んだり、目の前にいる人の生きざまを目撃することによって経験されることもある。また、心に響いて離れない詩編の一節——「汝のほかにはわれ誰をか天に持たん。地には汝の他にわが慕うものなし」(詩編七三・二五)を通してであったり、イエスの驚くべき

い根気と優しいほほ笑みをもって、すべてに優り、すべての内にいましたもうのだ。すべてのものの上に栄光の痕、血に染まった十字形の痕がついている。そして確信するに至った昔のトマスのように、私たちは「わが主よ、わが神よ」(ヨハネ二〇・二八)とため息をもらすのである。眼を挙げて見ることなどできようか。いや、どこに眼を向けば神は見えないというのだろうか。野も、小川も、雑踏の街も、神で充満しているのだ。だがモーセが知っていたように、誰も神を見て生きることはできないのだ——古い自我のままでは。死がやってくるのだ、恵みの死が、神と疎遠をきたす我意の死が訪れてくるのだ。その時パウロが次のように書いた意味が判るであろう。「今われ肉体にありて生きるは、神の子を信ずるによりて生きるなり」(ガラテヤ書二・二〇)。

人はこのような魂の打ち震える、愛に侵された一時から、平常な意識の状態へと戻ってくる。しかしこのような経験をした後、この世の《永遠なる愛し手》が、天の獵犬が、まぎれもなく実在するのであり、今後は必ずやこの真の《実在》によって生活が永久に決定づけられることを知る。聖アウグスティヌスのように、神に対するさらなる確証ではなく、確固たる信頼の心が増すことを求めるのである。遥かなる神の御手<sup>みて</sup>にこそ真の《中心》が存するのであり、神がすべてであるため、私たちは言うなれば「無」へと化するのだ。

宗教心は主観的なのだろうか。否、その神髄は客観に存し、絶対なる他者にある。そのお方<sup>かた</sup>の生命が私たちの真の生命であり、その愛は私たちの愛となり、その喜びは私たちの喜びとなり、その平和は私たちの平和であり、その重荷も私たちの重荷となり、その御意<sup>みこころ</sup>は私たちの意志<sup>こころ</sup>となるのだ。自我は神へと空けられ、神がまたそれを満たすのだ。感謝と驚愕を交えた謙虚な気持ちで、信頼しきった服従心と落ち着いた高潔な笑みのこぼれる喜びとをもって、私たちの小さな生を神のみ前に投げ出すのである。そして詩編の作者と共に唱えるのだ。「見よ、われは来たらん。わがことは巻物に記したり。わが神よ、われは御意<sup>みこころ</sup>を行なうことを楽しむ」(詩編四〇・七～八)と。なぜな

## II 聖なる服従への門口

この聖なる服従の生活への一つの門口を考えるにあたって、魂の内なる至聖所へと共に踏み入ろうではないか。神と人はそこで恐ろしいほどの直接性で出会うのだ。こういうとき、あらかじめ用意され尽くした言葉は無神経である。パウロは、第三の天については語るべきではないと考えた。しかし逆に、こういう事柄は全面的に神の驚くべき働きによるのであって、私たちは無であり、ただ受手にすぎないのに、それをあたかも自分自身の業、自分だけのものであるかのように思ってしまい、慎ましく静かにしていなければならぬと思ってしまう、誤った遠慮というものもある。「獅子がほえる、誰か恐れざらんや。主なる神が語りたもう、誰か預言せざらんや」(アモス三・八)と書いてあるではないか。

ある人たちは深遠な神秘体験を通して聖なる服従にいたる。

活ける神の手に陥ることは抗しがたい強烈な体験である。その人の存在の深みまでが神の臨在によって侵され、何の前ぶれもなくこの世の安心と保障が根こぎにされ、プライドに満ちた古い自己がすっかり無防備となってしまうような、信じ難い力を秘めた嵐に吹き飛ばされ、ついには「汝の波、汝の猛浪はことごとくわが上を越え行けり」(詩編四二・七)と叫んでしまうほどになる。その時、人の魂は言いしれない甘美な愛に満ちた《中心》へと奪い去られ、静穏と、形容しようがない安らぎと法悦に覆われる。そしてパスカルが、彼の最大の体験のただ中に、なぜたった一語「火」とだけ書いたのかが判るようになる。悪戦苦闘を強いられ、この世によって見えなくされた罪深い人びとや諸国、そして植物も、動物も、運行する天体までもがすべて新しくなり、その《中心》にある優しく働きかける愛に包まれているのだ。そこには、私たちがはっきりと見えるように、世々の聖人が心を開いてたたずんでおられる。見よ、彼らの心は私たちの心であり、また永遠なるお方の心なのだ。畏怖に満ちた壮厳さのなかで、その聖なるお方は妙なる愛と限りな

仰に襲われているのなら、気を取り戻して職にでも就きなさいなどと言わずに、辛抱強く、あなたの愛のうちに寛大に見守りなさい。少なくとも干渉せずに、神の聖なる御業みわざが彼らの魂の中で進行するがままにしておきなさい。そして若者たちよ。完成されたものになろうとするうごめきを内に持つ君たち、内側に神の甘美な喜びを持つ君たちよ、自我の消えやらぬ最後のかけらまでが放棄され、君たちが完全に神のものとなるまで、主に忠実でいなさい。

全き服従と全き従順、そして神の召命を全面的に聴こうと志す生活の徹底さは驚嘆すべきものである。その喜びは魅惑的であり、その安らぎは底知れず、その謙遜はいとも深く、その力は世界を揺るがし、その愛はすべてを包み、その単純さは人をすぐ信用する子供の純真さである。それは預言者や使徒たちの生きぬいた生き方と力であり、ナザレのイエスの生き方とその力でもある。イエスは「汝の眼、純一なれば、汝の全身は輝かん」（ルカ一・三四）ことを知っておられた。また、「イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外のことは何も知るまい」と意を決した使徒パウロの生き方と力である。聖フランシスの生き方と力もそうだ。貧しく小さき者として、この地上において彼ほどイエスの生き方を再現した神の子はいない。それはジョージ・フォックスの、そしてアイザックとメアリー・ペニントン（17世紀の英国のクエーカー・ジョージ・フォックスの同労者。）夫妻の生き方と力であり、徹底して神に帰依したジョン・ウールマンのそれである。彼は「神にわが全信頼を置く」と、「わが内なる徳性の原理に従って行動し、《真理》が私に示す以外のこの世の仕事はするまい」ということを心に決めたと言っている。この生き方と力とはまた、時代をこえた無数の知られざる聖人たちのものであるばかりか、今、私がこうして語っているこの会場で、賛意の笑みを浮かべている人たちのものである。そして、このぐらついている西欧文化を打ち破り、天によって導かれた創造的な人びとの交わりとして、教会をその正しい姿に戻すことができる生き方と力でもあるのだ。

ではなく、今、この工業化されたアメリカにおいて、君が、そして私が営むべき真剣かつ具体的な生き方としてである。

これは、しおらしい指先で上品なスカートをつまみ、気遣わしそうにこの世をその自分本位のぬかるみから引き揚げようとする、生温いありきたりの宗教心とはまったく異なる。私たちの教会や集会場はこのようなご立派な人当たりのよい人でいっぱいだ。道半ばまで神に従うクエーカーは沢山いる。三百年前の教会の人びとがそうであったように、私たちの多くは生温いありきたりの信仰を持つようになってしまった。ジョージ・フォックスとその仲間、輝かしい新発見をしたその情熱と、生涯を捧げたそのエネルギーとを挙げて、まさにこのように生温く凡庸で情熱に欠けた信仰に対抗して、身を挺したのである。ウィリアム・ジェイムズによると、宗教は人によってはなまくな習慣にすぎないが、別な人にとっては強烈な熱のようなものだ。キリストが生き、また死に給うたのは、決してなまくな習慣としての宗教のためではない。

聖なる全き服従、喜びに満ちた自己放棄、そして鋭敏に聴こうとする姿勢には、並はずれた度合いがある。人が後半の道のりも主に従おうとするとき、たんなる程度の差は本質的な相違へと変わるのである。イエスはこの事情を次のように鋭く言い表わした。「汝は新たに生まれざるべからず」(ヨハネ三・三)。パウロもまたこのことを知っていた。「人もしキリストにあらば、新たに造られたる者なり」(第二コリント五・一七)。

青年ジョージ・フォックスは、世間の基準を十分満たすだけの信仰を持っていたし、聖職者になるための学徒として推されてこともあった。だが彼の内にあった飽くなき神への渴仰は、そのような凡庸さから、真のいのちのパンを求める熱烈な探求へと彼を駆り立てたのであった。心ある親戚は彼に結婚して身を固めるようにと促し、彼が気がふれたと考え、放血治療のために医者連れていった。今日でいうなら、ちょうどベルギーやフランスの良心的兵役拒否者が精神科医の治療を受けさせられるのと同じように扱われたのである。そこで、ご臨席の親よ。もしあなたの子供がこの抑え難い神への渴

ていただきたい。それはこの羊飼いの声に、無条件に徹底した聖なる服従する生き方である。だがこの物語では一貫して神にこそ重点が置かれているのだ。主導する神、攻勢をかける神、捜し求める神、いのちを奮い起こす神、私たちの服従の拠り所である神、神の子らとなる力を与えたもう神に。

## I 聖なる服従の本質

マイスター・エックハルトは次のよう書いている。「多くの人は道半ばまで私たちの主に従うが、後半の道のりまで従う人は数少ない。多くの人は、持ち物や、友人や、この世の栄誉を放棄するが、自分自身を放棄するには、あまりもの打撃を被らなければならないからである」。私が謙虚に、大胆に、そして真剣に諸君に提案したいのは、まさにこのような、心からすべてを放棄し、いそいそと後半の道のりも神に従う、驚くべき生き方である。それはいささかの条件もない、徹底した服従を志向する生き方である。私はこれを文字通り、何の誇張もなく心底から言う。私自身に、そして諸君に向けて言う。無条件に主に服従して、人生を捧げようではないか。

この提案がいかに過激で革命的であるということにもし諸君が気づかないのなら、私の言おうとしていることは解っていただけない。ジョン・ウールマンやアシジのフランシスのように、いそいそと全きまでに服従して、後半の道のりを歩み、神のいとも微かな囁きにも聴き従う人は、男女を問わず、時にしか現われない。だが、人生にこのように全身を捧げる転機が訪れるとき、神は突如と進入してこられ、奇跡が行なわれ、この世をすっかり新しくする神聖な力が放たれ、歴史が変わるのである。現在、最も肝腎なのは、まさにこのような献身的な生き方をする人に人類が恵まれることである。今は、「見よ、ここにあり！かしこにあり！」(ルカ一七・二一)と言っている場合ではない。「汝こそ、その人なり」と言うべき時なのだ。私はこの非凡な生き方へと諸君を招きたいのである、——いや私を通して主が招いておられるのだ。それも、うるわしい理想や、望むらくば目指したい魅力ある模範として



死に成し遂げようと、この世で活動しているのは私たちだけではないのだ。

この《中心》から発した生活は悠々とした安らぎと活力にあふれる生活である。それは簡素な生活であり、静穏であり、不可思議ですらある。勝利を挙げた生活であり、輝きを放つ。時間を要しないが、私たちのすべての時間を占める。そして、私たちの生活設計を新たにし、打ち勝つものにする。何も必死になる必要はない。神が実権を握っておられるのだ。そして私たちの平凡な一日が終わると、私たちは安らぎのうちに、静かに床に臥す。すべてがよしとされているのだから。

## 聖なる服従

私たちの前に、人びとや諸国がもがき争い、苦労を重ね、果ては死に至るドラマが渦巻いている。不安げな警戒心と祈りのなかで、私たちはみな近來のこの悲惨なドラマから眼が離せないでいる。だが、人びとの魂の静謐のなかでは、永遠なるドラマが、かつてそうであったように今もなお繰り広げられている。そしてこの内なるドラマの成り行きに、歴史の表舞台の目もあやなパノラマの前途がかかっている。それは、人間の臭跡をつけ、容赦なく吠える《天の獵犬》のドラマである。それは荒野にさまよいでた迷える小羊が、丘を越えて賢い羊飼いがやってくる間も、落ち着けず、淋しく気弱にその飼い主を捜し求めるドラマでもある。神の心は羊飼いの心であって、その御腕みうでに小羊を抱くまでは落ち着かないのである。それはまた、永遠なる父が、あり余るほどのパンのある御許に放蕩息子を引き寄せるドラマである。ルーファス・ジョーンズ(1863~1948, 米国のクエーカー、ハヴァフォード大学哲学教授、アメリカ・フレンド派奉仕団議長)が「二重探索」と呼んだ、お互いに捜し求め合うドラマなのである。そして永遠なる愛の神がつねにその主役なのだ。

この内なるドラマの一つのより糸、羊飼いが小羊を見つける情景に注目し

大切ではあるが、それらはもつとこの先のことであり、世界復興へ向けた副次的な処置にすぎない。最も重要な第一歩は、神の栄光のうちに変容された、光り輝く聖なる生活なのだ。

この人びとへの愛は、神の愛に劣らず不可思議なものである。私たちは気の毒と思うから人を助けたいのだろうか。それとも純粹に愛しているからだろうか。この世は単なる同情よりももっと深いなにかを必要としている。愛を必要としているのだ。（なんと陳腐な響き、だがなんとという事実！）しかし人びとを愛する際に、私たちは忙しく躍起になり、すべての人や課題を網羅して私たちの愛の関心に収めるべきなのだろうか。否、それは神がなさることだ。私たちの内に働き給う神は、その巨大な関心を小さな束に分け、それを私たち一人一人に割り当てるのである。これが、私たちのなすべき仕事になる。《中心》からの生活は、天に導かれた生活なのだ。

私たちがおびただしい数の義務を引き受けてしまうは、多くの場合、「ノー」と言うことができないからである。私たちはある仕事が果たされなければならないと判断し、誰一人としてそれに従事する用意がないことを見る。そしてその必要性を見極めた上で自分の時間的余裕を推定して、予定のどこかに押し込むことができるだろうと判断する。だがそれは頭で決めたことであって、魂の至聖所の中でなされたものではない。私たちが頭による判断に基づいて奉仕への呼びかけに「イエス」もしくは「ノー」と応じるとき、その根拠を自分にも周りの人にも示さなければならない。しかしそういう呼びかけに応えるとき、それが私たちのいのちの《中心》から発する内的導きと勇気を鼓舞するような囁きの声をふまえた「イエス」ならば、あるいはその呼びかけを奨励する内的いのちの高揚がないことをふまえた「ノー」ならば、その根拠はただひとつ、私たちが洞察しうる神の御意みこころなのだということしかない。その時、私たちは導きのうちに生き始めたことになる。神は私たちが耐ええぬような、熱にあえぐほどの慌ただしさには導き給わぬことを、私は経験から知っている。神の宇宙的な忍耐おおらかさが部分的に、私たちの忍耐おおらかさともなるのだ。なにしろ、神はこの世で働いておられるのだから。神に捧げる仕事を必

一日の務めのただ中にありながら、心の中では短い祈りや、讚美の絶叫や、崇敬と優しい愛情の囁きを《内なる超越》に向けて発する、キリストと共に神の内に隠された生き方がある。まわりの誰もそれに気づく必要はない。こうしてあなたがたに語るのも、それが私のものではなく、他の人に分け与えられるべき神聖な付託なのであるからだ。人は言葉にされない、絶えざる祈りの状態の中に生きることができるのだ。それは神への祈りであり、私たちが心にかける人や事業に向けられた祈りでもある。何も急ぐことはない。それは栄光に満ちた得も言われぬ生活であり、<sup>にげ</sup>似気ない私たちがそこに生きることが許されている、内なる壮麗な世界なのである。あなたがたの何人かはすでにそれを知っており、そのなかから生きておられる。また、このような生活に憧れている方もここにいることであろう。そういうあなたにも開かれている生活なのだ。

さて、このような聖なる《中心》より、人生の任命が発せられるのだ。神との交わりはこの世の現状への関心を生じさせる。私たちは神の愛を自分だけのものとしてとどめておくことはできない。神の愛は溢れ出し、私たちを奮い起こし、世界の必要としているものが新たに見えるようにする。私たちは人びとを愛するが、彼らが見ることが出来るだろうに盲目であったり、目を覚ましてその身を犠牲にして生きねばならないのに世俗の安楽に囲まれて眠っていたり、この世の物資は一時的に託されているたけなのにそれを当然の権利として受けとめているのを見るにつけ、心が痛む。人びとを——己のごとく隣人を、この聖なる《中心》から新たに愛し直すからこそ、彼らの目覚めの手段となるように私たちは掻き立てられるのである。人間にとって最も深いところで必要なことは、食物でも、衣服でも、住居でもない。もちろんそれらは大切なものには違いない。だが、真に必要なものは神なのだ。私たちは思い違いをして、経済的な貧しさを貧困の本質と考えてきたが、そうではない。それは魂の貧しさなのであり、私たちを新たに創りかえる愛に満ちた神の平和の欠乏なのだ。経済上の救済計画が最も深いところの必要に本当に届いているかどうか、貧困を凝視するがよい。そういう方策はもちろん

ばならないと思う。だが実を言うと、このよう生活は時間がかからないばかりか、人の日課を複雑にするものでもないのだ。私は、崇敬と、讚美と、祈りと、礼拝の言葉が囁かれる生活が一日じゅう息づくことは可能であると考える。外見上にはとても忙しい日であっても、人は聖なる臨在のうちに堅く立つことができるのだ。確かに、私たちは静かな読書とくつろぎの時間をせめて三十分でも一時間でも必要とすることであろう。しかし自分の内部に、再創造の沈黙をほとんどいつでも保ち続けることも可能だと私は考える。ブラザー・ローレンス（1611～1691、フランスのカルメル会信徒、神秘家。視力を失って仕事ができなくなるまで30年台所で働いた。）の『神の臨在の実践』を読んで、私の心は弾む。その中の第四の談話の締めくくりで、彼について次のように報告されている。「彼は決して急ぐことも、のらくら過ごすこともなく、絶えざる落ち着きと魂の静穏を保ちながら、すべての事を時宜に適って行なった。『行動する時も祈りの時も私には区別はありません。台所の騒がしい中で、数人の人から同時にいろいろな違ったものを要求されても、聖餐を受けるためひざまずく時と変わりなく、静穏の内に神の臨在を覚えています。』」私たちが中心に降りて沈思しそびれてしまう真の問題点は、時間がないことではない。むしろ、私たちの多くが神を熱烈に喜び楽しむことに欠け、日夜を通して神に向けて、深く深く引き寄せられてゆく愛が足りないことに存するのである。

私が革命的とも言える生き方について語っていることは明白だと思う。宗教とは、他の義務の上に加えられ、かくして私たちの生活を一層複雑にするようなものではない。神と共にある生活は、いのちの中心である。他のあらゆることはこの神と共にある生活によって改造され、統合されるのである。それは眼を純一にする。最も大切なことは、渴いた世界に冷たい水をたえまなく配ることではない。私たちは「己のごとく、汝の隣人を愛すべし」という第二の大いなる掟を実行すべく、恐ろしいほど忙しくなるあまり、神への献身的な愛に関しては発達不全に陥りかねない。しかし私たちは隣人ばかりではなく、神をも愛さねばならない。前者は行わねばならないが、もう一方を途中でないがしろにしてはならないのだ。

は仕方がない。ましてや思い切って自分を抑制して、しかつめらしく、陳腐になることはできない。私たちはあまりにもながい間、しかつめらしく控え目にしすぎてきた。神の愛の火は、——それは私たちの神への愛の火であり、神の私たちへの愛の火であるが——、熱く燃えさかるものだ。「汝、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主なる汝の神を愛すべし」。私たちは本当にそうしているだろうか。私たちの心のなかで、終日、愛がしっかりと神に向いているだろうか。仕事の合間に、神への穏和な祈りと讃美をちりばめているだろうか。私たちは神の確固たる安らぎのうちに、魂の奥底にある安らぎのうちに暮らしているだろうか。そこではすべての重圧は取り去られ、神はすでにこの世に打ち勝った方、私たちの弱さに打ち勝った方であられるのだ。この変わることも朽ちることもない、尽きせぬ安らぎと、この静穏な力と焦りのない克服——私たち自身に対する内側の克服と、この世に対する外側の克服——であるこのいのちは、私たちのために備えられているのだ。それは重圧と不安と焦りから解き放たれた生活である。神の宇宙的な<sup>おほらかさ</sup>忍耐の一部分が私たちのものとなるからだ。私たちの生活は、神への愛という基層<sup>いわお</sup>の巖にしっかりと根を降ろしているゆえに、揺るがぬものになっているだろうか。これが第一にして大いなる掟である。

生活全体が根底から変革され、安らぎと力と栄光と奇跡に、姿も質も変えられような、不可思議な神の臨在のうちに生きることをあなたは望んでおられるだろうか。望んでおられるのならそれは可能なのだ。だが、忙しくて再創造される沈黙の中へと降りてゆく時間がないと言われるのなら、私はこう応じるしかない。「では、心底からは望んでおられないのですね。世界中の何にもまして、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして神を愛しているわけではないのですね」と。というのも、家族のなかに病人がいたり、子供たちが小さい時や、ものすごいプレッシャーが襲いかかる時を除いて、私たちが心底からしたいと思うことなら暇は見つかるものなのだ。

私は神に対する一途な愛の想いから、内面の聖なる臨在に専心わが身を捧げているかのようなふりをするいかなる虚偽表示も、容赦なく暴露しなければ

賽銭箱の前に立ち、男も女も捧げ物を投げ入れるのを見守っておられたように、ジョン・ウールマンの内面の生には聖なるお方がたたくずんでおられたのである。

私たちは気づいていようとなかろうと、この聖なるお方の黙して見守る眼差しのもとに立っているのである。その《中心》のうちに、つまり私たちの存在の根底に永遠なる方が住まう聖なる深淵の中で、私たちの計画や、神への捧げ物、果たされた任務という供え物は、幾度となく、その価値が見直されるのである。私たちが行なう多くのことは、私たちにとってとても重要に思える。どれもとても重要に思えるから、そうした奉仕に「ノー」と言うことが出来ずにきた。だが、クエーカーの古い言い回しで言われるように、私たちが中心に向かって降りて沈思する (center down) ならば、——いのちより高価な聖なる沈黙のうちに生き、徹底的に心を開いて、私たちの生活設計を心の沈黙の場に携えゆき、神の導きに順じて、行なうことも断念することも辞さないのならば、そのとき、私たちが行なっている多くのことは、それまでのヴァイタリティーを失ってしまう。私は個人的体験として恵みのうちに与えられたこの経験を、ここに証言したいと思う。そこでは私たちが行なう、あるいは行なおうとする多くのことに対する再評価が、私たちに代わってなされているのだ。そして私たちは何をなすべきか、また放置すべきかを知るのである。

いのちよりも大切なお方<sup>かた</sup>について、あなたがたと親密に、真剣に語らせていただきたい。あなた方は生活の一瞬一瞬を、あのお方のみ前で送ることを、心底から望んでおられるだろうか。あのお方を恋い慕い、渴仰しているだろうか。あのお方の臨在を愛しているだろうか。あなたの体を循る血液の一滴までもが、あのお方を愛しているのだろうか。一呼吸ごとに、あのお方を讃える祈りを息づいておられるだろうか。神の愛にあることを誉れとして、自分の内部で歌い、踊っているだろうか。聖なる服従の道を間断なく歩み、あのお方のものに、ただあのお方だけのものになろうと決意しておられるだろうか。私が昔風の伝道師のような語り口調になっているのは承知だが、それ

折しかその声に注意を払っていない。時折にしかその聖なる導きに服していない。私たちはこの内部にある聖なるものをこの世でもっとも貴重なものとして見なしてこなかった。これのみに仕えるべく、他のすべてのものを放棄していない。重ねて言う。私たちの恐らく大半は、この《内なる聖なるもの》に仕えるべく、他のすべてのものを放棄はしていないのだ。

ジョン・ウールマン (1720~1772, アメリカのクエーカー伝道者, 奴隷制廃止論者) は放棄した。彼はどんなときにもその声に傾聴して仕えるべく、外的な俗務を整理することに心がけた。彼は神聖なる《中心》との係わりに基づいて生活の簡素化を図った。彼が内部に見いだした全生活の《根》に対する一途な傾聴の姿勢以外、いかなることも本当はどうでもよかったのである。天よりも、地よりも貴重な、湧き出る神聖な導きと愛と臨在の囁き——クエーカーの発見はまさにここにあるのだ。ジョン・ウールマンは、決して彼の真に必要としていたこと以上には商売の負担を増やすことをしなかった。お得意さんがあまりに多く来た時は、より貧しい商人や洋服屋にその客を回した。彼の外側の生活は、内的な統合に拠って簡素化されたのである。彼は、私たちが天に導かれる人たちであり得ることを発見し、その天恵の導きに自分自身のすべてを無条件に放棄し去り、その《中心》に寄り添い、身をあたためたのだ。

私はいま、「彼の外面の生活は簡素化された」と言った。そして意識的に受動態を使った。彼はその簡素化を達成するために、もがいたり、断念したり、いきむ必要はなかった。彼は《中心なるもの》に帰服したことにより、その生活が単純になったのだ。それは総観的であり、純一な眼差しを意味した。「汝の目、純一なれば、汝の全身は輝かん」。彼の内部にあった数多い自己はひとつの真の自己に統合され、その真己の主眼は、偏に神の臨在と導きと御意のうちに、謙虚に歩むことにあつた。そこでは、彼の多数の自己が声高な投票で納得のいかない少数派を黙らせようとするのがなかった。彼のなかにあたかも議長がいて、厳粛で聖なる内奥の沈黙のうちに、会合の総意を推し量るようなものだ。クエーカーの事務会のこのような運営方法は、私たち一人一人の生活を内側から営むにも有効であると思う。ちょうどイエスが

の、無茶なペースに押しひしがれつつ、私たちは内面の不安により、いよいよ重圧を感じる。なぜなら、この気が急ぐ生活よりもはるかに豊かで深い生き方、焦ることのない静穏と安らぎと活力に満ちた生き方があるのだという暗示を受けるからである。ああ、もし私たちがそのような生活の《中心》にずっと身を置くことが出来さえすれば。もしもすべての音の源泉たる沈黙を見出だすことが出来さえすれば。私たちはこうした生活の深遠な《中心》を見出だしているらしい人びとを知ってもいるし、接したこともある。そこでは、生活の煩わしい呼びかけは統合され、「イエス」ばかりか「ノー」も確信をもって言えるのだ。私たちはこうした統合された生活、きわどい決断のしがらみに当惑することもなく、焦ることなく朗らかで生き生きとした前向きなその人びとの人生を見てきた。こうした人びとはただらと怠けているのでもなく、いかにも気が触れたかのようにぼんやりと瞑想に耽っているのでもない。彼らは私たちと同じようにそれ相当の負担を背負うのに忙しいのだ。ただ、その重荷で肩が擦れるようなことはなく、静かな喜びのうちに、軽快な足どりで進むのだ。彼らの日常生活上の些事の周囲には、限りない安らぎと活力と歓喜の香気が漂っているのである。私たちはといえば、重荷を課せられた生活のために重圧と緊張でいっぱいなのだが、彼らは落ち着いて安らいでいるのだ。

もしキリスト友会（クエーカー）が伝えることがあるとすれば、それは主としてこの方面においてであろう。生活とは、ある《中心》、神聖なる《中心》から営まれるはずのものである。そして私たち一人一人がこの不可思議な活力と安らぎと静穏——統合された誠実さと、確信と、単純化された多様性をそなえた生き方ができるのだ。条件はただひとつ、私たちが真にそう望むのならば、である。すべての人の内部には、神聖な深淵がある。それは聖なる《無限なる中心》、《心》、《いのち》であって、私たちに語りかけ、私たちを通して世に語りかけるのである。私たちのだれしものが時にこの聖なる囁きを聞いたことがある。時にはその囁きに従い、驚くほどつり合が取れた、効果のあがる生活が開始される。だが私たちのあまりにも多くのものは、ほんの時



と、私はハワイで過ごしたその一年、環境がある意味であまりにも単調であったため、ひどく苛立ったのである。

私たち西洋人は、私たちの重大な問題は外的なもの、環境から生じるものであると考えてしまいがちだ。私たちは内面の生活に熟練しておらず、そこにこそ問題の真の根が存するのだ。私たちの日課の複雑さを真にときほぐすのは外的な説明ではなく、内的な説明だと私は申し上げたい。私たちの関心が遠心的に散漫になることは、私たちの生き方が内的に統合されていないことを反映している。内なるひとつの総轄的な《いのち》によって私たちの中のいろいろな自己がまとめあげられないまま、同時にいくつもの自己になろうとしているのだ。私たちはそれぞれひとつの自己ではなく、複数の自己を総合した委員会とも言うべきものになる傾向がある。そこには市民としての自己、親としての自己、財務上の自己、宗教的自己、社会的自己、職業人としての自己、文芸的自己などがいる。その上、それらの自己はおのおの根っからの個人主義者であり、票決の度ごとに自分の票を声高に叫ぶばかりで、協力などはしない。そして、このように内側に対立する意見があるとき、私たちは往々にして、そのいずれを選ぶかを速やかに決めようとするアメリカの常套手段に追随してしまう。それはあたかも私たちの内にある数多い自己から成る委員会の議長が、多くの意見をひとつに集約・統合するのではなく、それぞれの決定事項についての得票をただ数えるだけで、不満の残る少数派を置きざりにしてしまうようなものだ。だが、それぞれの自己の言い分はなおも主張されるままだ。私たちが仮に黒人の教育に関する委員会で奉仕を引き受けたとすると、さらに同時に日曜学校のクラスを受け持つことができなくなることを遺憾に思ってしまう。私たちは統合されてはおらず、苦悩している。多くの責務に惹かれ、そのすべてを果たそうとする。

かくて私たちは憂鬱になり、不安になり、気が張りつめ、圧迫され、浅薄な人間になりはしないかという危惧さえ覚える。生活の縁辺をこえて、囁く声が、かすかな呼び声が感じられ、私たちが見過ごしてきたと分かっている、より豊かな生き方への予感が忍び寄ってくるからである。日常の外界の重荷

はきわめて僅かしかないような気がするのだ。そしてそれをうしろめたく残念に思いつつも、私たちは神の聖なる臨在における、揺らぐことのない、沈着な、より深い生活を望みながら、そこにこそ私たちの真の住み処があると知りながら、今週の予定はもういっぱいという理由から、来週まで見合わせてしまう。

しかしこの問題を単に論じることばかりに貴重な時間を費やしてはならない。だれしも自己憐愍にひたりたがるものだが、ありあまるほどの機会が却ってもたらす生活の貧しさを、いつまでもだらだらと嘆き悲しんではならない。また、この問題にこれほど時間をかけたのだから、今度は、今日こそはとばかりに、気をもみ、息を切らして、成果を得ようと、早計な解決に走ることもしてはならない。もとより私たちは剪定作業をしなければならない。だがそれは手入れする木とその置かれている環境や、その木を養っている生命の樹液を考慮してからのことである。それまでは、待ち構えた刈りこみ刀を使って容赦なく早急に切り込んではいならない。

まずはじめに、私たちの生活の複雑さについて、誤った説明を下していることを指摘したい。私たちはこの複雑さを生活環境の複雑さのせいにして非難する。いわく、生活が複雑なのは私たちの生きている世の中が複雑なためであり、ラジオや車から受ける刺激は一時間当たりに、祖母の時代と比べれば、その一日当たり以上のものなのだ、と。外界を尺度にしたこの説明は、時として私たちを南洋の島での静かな生活を夢思うように仕向け、あるいは祖父母たちがその祖父母と一日を過ごそうと雪橇そりに乗って、ジングルベル、ジングルベルが鳴り響くさくさくとした雪のうえを農場へと向かった、ありし昔の馬車の時代を思い耽るようにいざなう。実際、私は南洋で一年暮らし、熱帯でのながい、のんびりとした余暇を過ごしたことがある。そこで私が発見したのは、アメリカ人は本土おなじみの無鉄砲で熱に浮かされた生活を熱帯にも持ち込むということである。私たちの生活設計の複雑さを環境の複雑さのせいにしたがるのはやまやまなのだが、それは当てはまらない。また環境をシンプルにしたところで生活の簡素化につながるわけでもない。実を言う

Community (祝福された共同体), (4) The Eternal Now and Social Concern (永遠の「今」と社会への関心), (5) The Simplification of Life (生活の簡素化) である。今回掲載するのは1939年に書かれた(5), および同年フィラデルフィアで開催されたクエーカーの年会総会でケリーが口演した(2)の前半である。

## 生活の簡素化

私たちが今日直面している問題を論じるのにさほどの時間はいらぬ。近代都市における私たちの生活はあまりにも複雑で、過密になっている。どうしても果たさねばならないと思う責務でさえ、ジャックと豆の木のように一夜にして拡大してしまい、あっという間に、私たちに重荷がのしかかり、委員会で打ちひしがれ、気が張りつめ、息が切れ、せきたてられ、果てしのないアポイントの連続で喘いでいるのである。私たちは夫の良き妻、家庭の良き創り手、子供の相手役、友の良き友になるには忙しすぎて、友なき人の友になる時間など全くない。ところが、家族と共に静かなひと時を過ごすために公の約束や関心事から退こうとすると、市民としての罪悪感をつのらせる声が、気にかかる要求を耳元で囁くのである。子供たちの学校も私たちの関心の対象であるべきだし、地域共同体の市民レベルの問題も私たちが意を注ぐことを必要としている。またより広く、国の、そして世界規模の問題が重くのしかかっている。職業上の立場や社会的な責任、あるいはあれこれの重要な組織における身分は、私たちに要求をつきつける。そしてそれらの要請のせめて必要最小に対してでも誠実に応じようと、必死になる。それでいて私たちは倦み疲れ、息を切らす。そのみならず、度量の広い人物になれば伴うだろうと信じている、安らぎや喜びや静穏をほとんど味うことなく人生が過ぎ去ろうとしているのを痛感し、後悔する。心の沈黙の深みに入る機会

トマス・ケリー  
『敬虔の遺書』

試訳（１）

コール ダニエル

[訳者序文] ここに載せる訳文はアメリカのクエーカー、Thomas R. Kelly (1893～1941) の遺稿集 *A Testament of Devotion* の一部である。訳者はこの先数回に分けつつ、本書の全訳を手懸けるつもりでいる。著者のケリーは日本では殆ど知られていないが、その夭逝後、彼のエッセイ五編から成る *A Testament* が急遽 Harper & Row 社により出版され、爾来、半世紀以上に亘り愛読されており、宗教書のモダンクラシックの位置を保ち続けてきた書物である。ケリーの愛弟子の一人、キャンビー・ジョーンズは訳者の大学の恩師であり、あわせてケリーが同ウィルミントン大学で教師生活を始めたこともあり、訳者にとっては親しみのある書である。訳者は数年前、この書物の一編を福岡女学院大学の学生とともに読み、粗訳をしたことがあり、いつかは試訳を公にしたいと考えていた。そこへ1999年の7月、本書の和訳が『内なる光—信仰の遺言』と題して教文館より刊行された。ところがこの訳本を繙いてみると、まるで分からない文章になっていることが判明し、訳者は啞然とさせられた。聖書の引用から英語表現の基本的な取り違えまで、訳者としては悪訳と呼ばざるをえない出来栄である。このような形で名著が日本に紹介されるのは遺憾であるといわざるをえない。この試訳がかかる現状を僅かにでも是正することに役立てば訳者としては幸甚である。

念のために、原著の五編のエッセイの題名をここに挙げる。(1) The Light Within (内なる光), (2) Holy Obedience (聖なる服従), (3) The Blessed